

特別講話「日蓮宗と雅楽」

曲目解説

◆日蓮宗宗歌 立ち渡る

日蓮宗の宗歌「立ち渡る」は、日蓮聖人のお手紙の1つである『身延山御書』の末文にある日蓮聖人の和歌に、作曲家弘田龍太郎氏が節をつけたものです。

この和歌は弘安五年（1282年）8月21日の作とされ、日蓮聖人のご入滅に先立つこと五十余日の晩年の作であり、身延山を^{りょうじゆせん}霊鷲山（インドに実在する山）に見立てて作歌されたと言われています。

日蓮宗の^{しゅうか}宗歌として、宗門の公式行事等では、この「立ち渡る」がうたわれています。

「^{たち}わたる ^み身の ^{はれ}うき雲も ^{はれ}晴ぬべし ^{たえぬ} ^{みのり}御法の ^{やまかぜ}鷲の山嵐」

◆管絃 平調音取（かんげん ひょうじょうのねとり）

平調は、^{とうがく}唐楽六調子の一つで、平調（洋楽のミに近い音）を^{きおん}基音とした^{りつせん}律旋の調子です。

音取は、管絃演奏に先立って奏する短い曲で、音律を整えその調子の雰囲気を作り、^{しょう}笙・^{ひちりき}篳篥・^{おんど}笛の^{おんど}音頭と^{かつこ}羯鼓そして^{おも}主琵琶・^{おもごと}主箏が奏します。

◆管絃 平調越殿楽（かんげん ひょうじょうえてんらく）

雅楽の古典曲では一番聞き馴染みがある曲で、簡潔かつ優雅な旋律と端正な形式で知られており、漢の文帝（在位前180年～前157年）が作ったといわれていますが、一説には日本で作られた曲であるともいわれています。原曲は平調ですが、^{わたしもの}渡物（移調された曲）として、^{おうしきちよう}黄鐘調と^{ばん}盤^{しきちよう}涉調に同名の曲があります。

◆声明 高祖讚 雅楽附物（しょうみょう こうそさん ががくつけもの）

日蓮宗声明「高祖讚」は日蓮宗の大本山池上本門寺が日蓮大聖人御入滅第700遠忌の際、昭和56年10月13日午前8時に池上本門寺祖師堂で営まれた^{りんめつどじ}臨滅度時法要で初めてお唱えされた声明です。

作詞は^{と だ こうぎよう}戸田浩暁師、声明の節は「天台大師^{みえく}御影供」の「^{がさん}面讚」を基に、^{あまの でんちゆう}天納傳中師のご助言を頂き、^{はやみにししゅう}早水日秀師が^{てんぶ}添譜を致しました。

雅楽譜は、桑原ゆう氏の補曲により令和3年12月19日に日暮里^{えんめいいん}延命院で初演されました。

◆舞楽 萬歳楽（ぶがく まんざいらく）

唐の国（618年～907年）では、^{せいおう}聖王の治世に鳳凰が飛んできて王の萬歳を祝福したと伝えられ、この曲はその声を楽に、その姿を舞に写したものとされています。古くから皇居の即位の礼を始め、慶賀の宴などに舞われてきました。

◆舞楽 抜頭（ぶがく ぼとう）

天竺の音楽で、^{ばらもんそうじょう}婆羅門僧正が日本に伝えたとありますが、一説には^{りんゆう}林邑の僧侶、^{ぶってつ}仏哲が日本の唐招提寺に伝えたとも言われています。

猛獣に親を襲われた^{こじん}胡人の子が、獣を探し求めて山野を駆け巡り、仇を討ち、歓喜の様を舞にしたとされています。

また、清少納言が枕草子に
「髪をふりあげたる まみなどはうとましけれど 楽もなほおもしろし」と記したように古来より
広く知られる演目です。

